

SCS体験記

農学部生物生産学科

甲本 達也

koumotot@cc.saga-u.ac.jp

1 はじめに

農学部が参加している連合大学院（鹿児島大学が基幹大学で、佐賀大学の他に宮崎大学、琉球大学の計4大学の農学部と鹿児島大学水産学部の5学部が連合する博士課程の大学院）では、2年時を対象として学位論文の中間発表を課している。学位論文の指導には、佐賀大学以外のいずれかの大学の教官が関わっており、学位論文審査会には全構成大学から審査員として関係している教官が一同に会して審査することになっている。中間発表では、必ずしも全関係教官が同時に集まる必要はない。したがって、関係教官がそれぞれの大学で同じ時間帯を共有できれば、このような発表会への衛星通信大学間ネットワーク（SCS、Space Collaboration Systemの略）の利用は便利である。特に、農学部にとって、これまで情報処理センターに出向き、職員を煩わし、時間帯をやりくりしなければならなかったのが、農学部に居ながら出来るようになったことは大きい。

昨年11月25日（水）15:00～16:00に私の研究室のインドネシアからの留学生、F.J. マノッポ氏の学位論文の中間発表会を宮崎大学と佐賀大学の2局を結んで実施した。以下にその体験を述べる。

2. 農学部にとって初体験の送信

発表の送・受信は発表会場の農学部多目的会議室にある機器を利用し、情報処理センターを介して行った。これまで、連合大学院の構成大学間でのSCS利用はあまりなかった模様で、本学部でも連合大学院関係の会議の受信は経験していたが、送信は初体験ということであった。したがって、今回のSCS利用に際しては農学部の元情報処理センター運営委員の加藤治教授のほかに、情報処理センターの江藤助手と小野技官の手を多いに煩わせた。ここに紙上を借りて厚くお礼を申し上げる。

3. 反省点など

11月25日の中間発表会は成功したが、2週間前の11月11日に行った最初の試みは失敗した。理由は、ATM（非同期転送モード）の調整がうまくいかなかったことによる。ATMの調整はなかなか微妙とのことで、最初うまくいくかなと思われたが調整に時間を取られているうちに発表会の持ち時間は時間切れとなってしまった。ATMの調整をしているときに、多目的会議室と情報処理センターとの連絡を口頭でせざるを得なかったり、職員がいたり来たりしなければならなかったなどの問題もあった。また、後に、ATM作動前に30分位のウォーミングアップが必要だったと聞いた。何事をするにもウォーミングアップは必要のようだ。

11月11日の失敗の後、次回の日程を組んだ。その際、SCS利用の日程管理はメディアセンターが行っており、2週間前までに予約を取らなければ希望の日程、時間帯が確保できないことがあるということであった。SCSを利用するには送・受信両方の日程調整が先決であることは言うまでもない。

今回、マノッポ氏は発表にOHPフィルムを使用した。しかし、プロジェクタは通常の透過型ではなく、反射型であった。反射型の場合、フィルムよりは普通のコピー用紙を使用した方がきれいに写るようだ。

4. おわりに

とにかく、今回のSCS利用は初めての体験であり、主催者として、いま送っている像が相手のテレビ画面に果たして見えるように写し出されているのかなどが気になっていたが、発表が終わってからの質疑のときに発表内容に立ち入った質問が出されたのを見て、杞憂であったことがわかりほっとした。宮崎大学の方で発表の模様をビデオに撮っているからと連絡を受けているので機会を見て写り具合を確かめてみたいと思っている。